

平成27年2月18日(水)

老球の細道117号

O u r T e a m (チームへの帰属意識)

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

今頃の時期は各地区ともU-17地区選抜大会の練習に余念がない頃だろう。現職の頃は会津地区選抜チームの練習を何度も見学した。他のコーチの指導のもとで自分のチームの選手がどのように活動しているかを見ることは、とても勉強になり、勇気がある。選手の姿を通して自分の日頃の指導がくまなく評価されるからである。

どのレベルでも選抜チームとなると、プライドもさることながら問題も出てくる。自分のチームという帰属意識に欠け、一体感がなかなか生まれにくいことである。強いチームから選ばれた人は伸び伸びとプレーし、弱いチームからの人は遠慮がちになる。

毎年全国高体連から発行される『全国高体連ジャーナル』(2010年号)という機関誌の中で、メンタルトレーニングで有名な福島大学の白石先生が「本番に強くなる」というテーマで、サッカー前日本代表の岡田武史監督のチーム作りについて書いていた。それによると、岡田監督はワールドカップ時に、代表選手達に6つのコンセプト(考え方)を絶えず求めたという。それは、1「Enjoy(楽しむ)」、2「Our Team(自分のチーム意識)」、3「Do your best(最善を尽くせ)」、4「Concentration(集中)」、5「Improve(絶えず進歩、向上)」、6「Communication(コミュニケーション)」

この中でも、日本代表としてまとまって活動する期間が少なく、常に何人かの選手が入れ替わる代表選手達に、「Our Team」を、特に強く求めたそうである。そして、そのコンセプトを説明する際に「村の夏祭り」という例え話を選手達にした。

【ある村で、毎年、夏にお祭りをやっていました。祭りの始まりは、一斗樽をぶち抜いてみんなで乾杯します。ところがある年のこと、飢饉がやってきてお祭りどころではなくなっていました。こんな時こそお祭りをやって、気持ちを明るくしたいと思いましたが、いかんせん景気づけの一斗樽がありません。

みんなが思案投げ首をしているところに、村の知恵者がこう言いました。『みんなの家には、コップ一杯ぐらいの酒はまだあるだろう。それを持ち寄って、去年使った一斗樽に入れて蓋をし直そうぜ。それをぶち抜いて乾杯すれば祭りを始められるじゃないか』と。

この知恵者の提案にみんな賛同して家に帰り、各々コップ一杯の酒を持ち寄りました。一斗樽が一いっぱいになったところで蓋をして、気合いを入れてぶち抜きました。めいめいコップに酒をつぎ、乾杯の音頭とともにぐいと飲んだ瞬間、どの人も怪訝な顔をしたというのです。さて何が起こったのでしょうか

「まずかった」、「臭かった」、「薄かった」など色々答えが予想されますが、どれも正解ではありませんでした。答えは「水だった」。つまり、村の誰もが「俺一人ぐらい水を持っていってもわかりはしまい」と考えたわけです。「自分一人ぐらいいいだろう」この考えが組織、チームを壊してしまう】

かつて全米大学選手権大会(NCAA)を3回制した名将ボビーナイト率いるインディアナ大学バスケットボールOBのメンバーが常々口にしていた言葉がある。

「かつてインディアナ大学バスケット部の一員であったことを誇りに思って思い出す」